

氏名	楊 天帥		
ヨミガナ	ヨウ テンシュウ		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博国第1号		
学位授与年月日	令和3年3月25日		
学位論文等題目	Analysing Socially Engaged Art from an Individual-Level: Wochenklausur, Rebuild Foundation and Hong Kong House In Echigo Tsumari Art Triennale		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科） 熊倉 純子
（副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科） 毛利 嘉孝
（副査）	東京藝術大学	准教授	（国際芸術創造研究科） 住友 文彦
（副査）	九州大学	准教授	（芸術工学研究院） 中村 美亜
（副査）	University of Washington	Associate Professor	（Department of Asian Languages & Literature） Justin Jesty

（論文内容の要旨）

Since the 1980s, there has been an increase in socially-engaged art (SEA) projects. In contrast to conventional, decorative, and expressive art, this kind of artwork usually aims at creating actual social changes. Scholars have suggested theories to explain how such changes are made possible on a macro level. However, none of these works aim at addressing the relationship between an individual experience and social impact. As a result, theoretical analyses of SEA's social impact often relegates individual participants involved in the project to the margins. This dissertation suggests the importance of addressing individual experiences so that their voices may not be subjected to "policing" by intellectual discourses.

In this dissertation, I first argue that in the discussion of the arts and social change, focusing on individual experience is not a new invention since there was a concern of individual sense before the 19th Century. I then argue that during the era of industrialization, more theorists began to concern themselves with how the arts may influence abstract entities such as class and ideology instead of individuals. This trend continues until now to the debate of SEA.

Theorists and practitioners of SEA nowadays rarely see unique individuals as subjects.

However, there are also exceptional cases, such as Adrian Piper and Joseph Beuys. Since the former takes her reference from Kant and the latter echoes with Schiller, I argue that it is possible for us to return to the individual by learning from the German Idealists.

I then present 3 case studies: The Hong Kong House in Echigo Tsumari Art Field, the Rebuild Foundation, and the Wochenklausur. The first two case studies are done through an ethnographic approach. Through interviewing people involved in the projects, I show in the Hong Kong House study that by looking at individual experience in the communication process, it is possible to see communication as a complex process of which different participants have different intentions and desired outcomes. I also show how the presence of that Wochenklausur creates social impact by creating an alternative reality which shows that changing the society is indeed possible. I conclude that it is both valid and instrumental to conduct an individual-level analysis for SEA research.

## (総合審査結果の要旨)

### 【概要】

本論文は、Socially Engaged Art (社会的に関与する芸術/以下SEA) と呼ばれる、20世紀終盤から現在まで世界各地で新たな芸術潮流を生み出しつつある現象に関して、フィールドワークによるエスノグラフィを基に、美学および哲学的な理論の比較分析を試みた研究である。フィールドワークは、日本の越後妻有アートトリエンナーレの香港ハウスの参与観察、米国シカゴのRebuild Foundationのヒアリング調査、そしてオーストリアのWochenklausurのインタビュー調査によって構成されている。

審査会では、研究の視座の独創性とフィールドワークの資料的価値が高く評価され、学位授与にふさわしい成果と認められた。

### 【主査の所見】

総合的な見地から評価すべき点として、以下の2点を挙げる。

#### 1) 国際的かつチャレンジングな視座を貫いていること。

まず第一に日本、米国、オーストリアという3か国でフィールドワークをおこなっている行動力は瞠目に値する。それに加えて、日本と欧米のSEA研究の欠陥を補い、両者の架け橋になるべく独自のアプローチを試みた研究の企図は、独創性に溢れ、かつ香港出身の筆者独自の国際的視点といえよう。すなわち、欧米のSEAに関する議論がこれまであまねく抽象的な理論に偏っており、一方、日本におけるアートプロジェクト研究はエスノグラフィによる事例分析にとどまり普遍的な理論抽出に至っていない点を鑑みつつ、芸術を中心に論じる西洋的視点を脱却すべく、各地のSEAにかかわる非芸術家や市井の人々に注目して、彼ら/彼女らのささやかな「行動のずれ」を抽出し、さらにそれを哲学や認知科学など学際的な考察を通じて、SEAがそれにかかわる人々にどのような変化をもたらしているのか、理論化を試みている。

#### 2) エスノグラフィの着眼点の高いオリジナリティ。

越後妻有の香港ハウスにおける異言語と通訳の問題において、地域住民の「香港ハウスのアーティストは日本語が通じない」ということに対する微妙な違和感や、通訳を介したコミュニケーションに香港人アーティストの制作行為が影響される様子(第3章)、シカゴのサウスサイドで静かにブラックコミュニティの文化創造にいそむる人々(第4章)、Wochenklausurの仕掛けるメディア・トラップにひるんで、つい許可を出してしまう地方政府の官僚たち(第5章)——いずれも通常のSEA研究では看過されがちな些細な事象に注目し、微妙に行動に変化をきたしてしまう人々の様子を、淡々としかし鮮やかに描き出している点は、従来のSEA研究が陥りがちな、性急に社会的価値に紐づけようとする呪縛とは無縁のものである。筆者の個性がいかに発揮された、オリジナリティに満ちた着眼といえよう。

### 【課題/副査の所見】

一方で、主に後半の第6章と第7章で展開される美学・哲学的な理論分析においては、いくつかの課題が指摘された。副査の所見では、「<主体>や<個人>をめぐる思想史的な議論はやや一般的な記述にとどまっております。物足りなさを感じた」(毛利)、「第6章において、エスノグラフィから得られた内容と理論的な考察の接合が十分に吟味されておらず、説得力に欠ける記述があった」(中村)、「分析と論理の組み立てには飛躍や欠落もあると感じられた。とりわけ、個人の内面が変化する際に与える影響を言語の役割に着目するだけでなく、芸術作品が作り出す物質や非言語的コミュニケーションが感情に与える影響はこの分野の研究では不可欠ではないか」(住友)などの指摘がなされている。

LaclauとMouffeによるAntagonismの概念を、集団的な言説の権力構造から個人的行動の変容へと読み解きなおす試みにおいて、認知哲学を援用してマインド・マップや「予測誤差」の概念を用いた発想は大胆ともいえるチャレンジであり、その発想の独創性には一定の評価をしたいところではある。が、読み解きなおす部分の記述がやや不十分で、飛躍がある感が否めない。また、「予測誤差」というタームを3つのエ

スノグラフィと関連づける際も、もう少し丁寧な解釈が述べられると、より説得力がましたように思われる。

#### 【総合的な所見】

上述のような不十分さも認められるが、総合的には下記のような評価を得た。

“In each case his research brings to light new material and perspectives.” (Jesty)。「芸術家や芸術史の側でなく、それを取り巻く社会の構成員にとって現代の芸術が持つ役割や可能性を指摘しようとした」点は「大きな貢献」(住友)。「SEAが社会に変化を与えるプロセスをより正確に記述しようとした意欲的な研究である。抽象論・概念論に陥りがちだったこれまでの議論とは一線を画す内容で、特に、あたりまえ、常識とされている事柄が攪乱されることにより、人々の認知に変化が起こり、そのことでコミュニティのあり方に変化が生まれるというプロセスに着眼した点は非常に重要である」(中村)。「いわゆる脱構築、脱中心化、脱主体性<ポストモダン>理論が全盛の状況下で、あらためて近代的な<主体>subjectに支えられた<個人>をカント以降の西洋哲学の伝統から掘り起こし、現代の社会的芸術の文脈に再定位するプロジェクトは、きわめて野心的な試みであり、芸術の<社会的転回>(ビショップ)を批判的に相対化する重要な研究として位置付けることができる」(毛利)、丁寧なフィールドワークの資料性の高さとともに「いずれも社会的芸術が個人に与える影響と、プロジェクトの役割が詳細に描かれており、多くの発見に溢れている」(毛利)。日本、米国、オーストリアという「全く異なった地域と環境の比較研究となっており、その手法自体が<移動>する芸術の<比較研究>の興味深い事例となっている」(毛利)。

最終的には、“His theses will surely be read by other scholars in the field, and his case studies have potential to be turned into peer-reviewed articles.” (Jesty).

「近年のこの領域をめぐる論争に一石を投じる野心的な研究として大きな価値があると判断する」(毛利)など、研究の総合的な成果が認められた。

本研究は英語で書かれたもので、今後、国際的な伝播が期待されるものである。西洋的な思考方法に大胆に挑む本論は、多くの批判を浴びることも予想される。国際芸術創造研究科における初の博士論文から、世界各地でさまざまなpolemicが生まれ出る可能性に期待しつつ、博士号授与とする。